

腸造影上の特徴的所見部位と癌の局在部位とは80%の症例で一致した。②日虫卵の有無により大腸癌局在部位に有意差はない。③大腸癌症例に占める日虫症合併例の頻度は、1981年の検索に比し低下している。今日の検討では、日虫症と大腸癌発生の関連性は見出せなかった。

46. 急性腹症で発見された副腎皮質癌破裂の1例 (谷津保健病院内科)

鳥居 信之・新井 信・藤野 信之

症例は34歳女性、右季肋部痛を主訴に来院した。US、CT等により、右腎上極に径10cmの腫瘍が認められ腫瘍内および右腎被膜下に出血を伴う右腎癌破裂と診断、また胸部X線にて両側肺転移を認めた。癌破裂による出血のため緊急手術を施行したところ、右副腎の壊死と出血を伴った巨大腫瘍と判明、組織診より副腎皮質癌と確定診断された。副腎皮質癌は稀な疾患であり、腫瘍の増大による腹痛や腹部腫瘤により発見されることが多い。有効な化学療法もなく予後は不良である。最近になって、CDDPを中心とした化学療法の有効例が散見されるに過ぎないが、我々は術後よりCDDP、5-FU、Adriamycinによる化学療法を施行し有効と思われた。以上のごとく、癌破裂で発見され化学療法が有効であった副腎皮質癌の症例を経験したので、若干の文献的考察を含め報告した。

47. 虫垂を原発とした腹膜偽粘液腫の1例 (谷津保健病院外科)

森山 宣・御子柴幸男・糟谷 忍・
平山 芳文・藤田 徹・宮崎正二郎

症例は48歳女性。胆石症 follow のため来院。エコー検査施行したところ下腹部を中心に多量の腹水を認め、精査目的で入院となった。腹水穿刺にて淡黄色ゼリー状粘液を吸引し細胞診の結果 mucinous adenocarcinoma が疑われた。CT検査で右卵巣に cyst を認めるも原発は不明であった。以上より原発不明の腹膜偽粘液腫の診断にて手術施行した。手術所見は腹腔内全体特に骨盤腔に一部被膜を伴った淡黄色ゼリー状の腹水認め、小腸・大腸の serosa, omentum, 腸間膜へのゼリー状粘液付着を認めた。また、虫垂は腫大し先端部よりゼリー状粘液の漏出を認めた。appendectomy, 右 oophorectomy 施行し腹腔内洗浄後 CDDP 100mg 注入し閉腹した。病理組織検索の結果、虫垂の papillary adenocarcinoma で卵巣は benign であった。術後5カ月を経過し、現在外来にて経過観察中である。

虫垂を原発とした腹膜偽粘液腫は比較的まれであり、若干の文献的考察を加え報告する。

48. ポリープ状を呈した結腸動静脈奇形の1例 (筑波胃腸病院)

日高 真・戸田 一寿・大橋 正樹

結腸動静脈奇形は、これまで40例が報告されているが、その形態は、軽度の隆起、あるいは平坦な赤色調の病変として認められている。今回、多発し、bridgingしたポリープ状の形態を示した症例を経験したので、稀な1例と考え、報告する。

症例は49歳の女性。下腹部不快感を主訴に当院を受診。注腸造影にて上行結腸に多発性のポリープ状の隆起を認めた。大腸鏡は挿入できなかった。術前に確定診断はつかなかったが、結腸ポリープの診断で、平成3年4月18日、右半結腸切除術を施行した。病理組織学的には、粘膜下層の血管が異常に、拡張、増生しており、粘膜下層が隆起を形成するに至っていた。よって、結腸動静脈奇形の確定診断を得た。

49. 高度貧血を呈した巨大 Meckel 憩室炎の1例 (中山記念胃腸科病院)

元 鍾聲・林 恒男・田中 精一・
磯部さく子・佐藤 秀一・今里 雅之・
有賀 淳・武雄 康悦

症例は21歳男性。易疲労感を主訴に来院。入院時血色素5.3g/dlの高度の貧血を認めた。血清鉄31μg/dlと低く以前に下血もあったため消化管出血を疑い上部および大腸検査を行ったが、特に異常はなかった。経口的腸追及検査を行ったところ回腸中部に憩室を認めた。手術を行い回盲部より約80cmの部位で腸管膜対側に長さ11cmの憩室を認めた。粘膜、筋層、漿膜からなる真性憩室で一部に異所性胃粘膜を認め、さらにUI IIの潰瘍も認めた。術後貧血は順調に改善し退院となった。

50. 成人腸重積症の2例

(社会保険山梨病院外科, *同病理)

井上 雄志・草野 佐・小沢 俊総・
矢川 彰治・植竹 正紀・野方 尚・
高石 祐子・小俣 好作*

成人腸重積症は比較的稀な疾患である。我々は、術前に確定診断を得た2症例を経験した。〔症例1〕39歳女性。主訴：下腹痛、平成元年より下腹部痛出現、いくつかの医療施設を受診するも確定診断はつかず、平成3年10月精査目的で当院入院となった。〔症例2〕63歳女性。主訴：下血、昭和63年に下血、上腹部痛出現